

國學院大學學術情報リポジトリ

2022年度国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): NDC9:069.5, NDC9:160.4, NDC9:161.3 キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001632

来て、見て、体感する神道と日本の宗教文化 —國學院大學博物館の取り組みを通して—

深澤 太郎
(國學院大學)

はじめに

博物館において宗教文化を「みせる」ためには、どのような工夫が必要なのか。この「ミュージアムでみせる宗教文化」では、神道・仏教・キリスト教系の大学博物館を取り上げ、それぞれの館における取り組みを比較し、かつ共通点を探っていく。その前提として、日本宗教に関する研究成果を公開してきた國學院大學博物館の概要を紹介し、今後の議論の糧に供しておきたい。以下では、特に、「来る、見る、体感する」といった3つのテーマに絞って卑見を述べておく。

I. 國學院大學博物館に来る

(1) 博物館の概要

國學院大學博物館は、1928年（昭和3）創立の「考古学標本室（後の考古学資料室、考古学資料館）」と、1963年（昭和38）に設けられた「神道学資料室（後の神道資料館）」を淵源とし、2023年（令和5）で創立95年、2028年（令和10）で創立100年を迎える大学博物館である。1882年（明治15）の皇典講究所開齋と同時に「文庫」として創立された「國學院大學図書館」に次いで歴史の長い大学附置機関であり、「学術資料館」への統合や、「伝統文化リサーチセンター資料館」の設置を経て、2012（平成24）から「國學院大學博物館」と名称を改めた。現在は、同じく研究開発推進機構内の考古学・神道学研究を担う「学術資料センター」と、1977年（昭和52）創立の校史資料室を前身とする「校史・学術資産研究センター」とともに、大学ミュージアム活動の中核を担っている。

その使命は、1) 日本文化の特質を明らかにするための研究、2) 本学学生に対する教育参考、3) 社会に開かれた大学の窓口としての社会貢献の3本柱であり、展示・出版・普及事業・データベース構築などを通して、研究・教育・公開の実を挙げてきた。館内には、直接の来館者に日本文化と神道に関する理解を深めて頂くため、総合日本学

としての「国学」の興りと、國學院大學における研究の歩みを紹介する「校史展示室」、考古資料から日本列島の人類史を概観する「考古展示室」、神道をはじめとする日本宗教の姿を示す「神道展示室」、そして特別展・企画展などを実施する「企画展示室」を設けている。企画展示は、本学が実施してきた研究成果を公開する場でもあり、歴史・文学・宗教関係を中心に、金田一京助没後50年・久保寺逸彦没後50年に合わせた『アイヌプリー北方に息づく先住民族の文化―』展や、沖縄返還50年を記念した『うちなぬゆがわりや―琉球・沖縄学と國學院―』展など、アイヌ文化・琉球文化も含め、広く社会の関心を集めているテーマにも積極的に触れてきた。

(2) 博物館の展示

國學院大學博物館の常設展示は、校史・考古・神道の各展示室を中心としている。但し、博物館施設の設えとしては、来館者の動きを規制する強制道線を採用してはならず、自由に観覧できる形を採ってきた。その中でも、日本の宗教文化に特化して理解を深める観覧順路としては、本学による研究の歩みを辿る1)校史→考古→神道展示室コース、日本列島における宗教史をダイジェストで通観する2)考古象徴展示→三輪山祭祀遺跡→神道展示室コース、そして神道の概要を理解する3)三輪山祭祀遺跡展示→神道展示室コースを薦めたい。

i) 國學院大學の研究成果コース（校史→考古→神道展示室）

第1のコースは、各展示室を順番に巡る通常の順路であり、本学が積み重ねてきた研究活動に基づき、日本列島における人類史と、神道をはじめとする日本宗教の特質を明らかにするものである。

ii) 日本列島の宗教史コース（考古象徴展示→三輪山祭祀遺跡展示→神道展示室）

第2のコースは、考古展示室冒頭の象徴展示、すなわちモノリス状のハイケース群に先史時代以来の宗教文化に関するマスターピースを展示することによって、日本宗教史のダイジェスト的な理解を促すことから始まる。突き当たりには、今日的な日本宗教の原型が確立されていった中世の鏡像を展示しているが、古墳時代の祭祀に関する展示コーナーから右折すれば、後述する「三輪山祭祀遺跡展示」を経て、神道展示室へ入ってゆく。

iii) 神道と日本文化コース（三輪山祭祀遺跡展示→神道展示室）

第3のコースは、奈良県桜井市大神神社の神体山である三輪山の麓、山ノ神遺跡における磐座の様子を再現したコーナーを起点とするもの。古墳時代における祭祀遺跡の姿から、神祇祭祀の原型が形成されてゆく様子を捉えた上で、古代の公祭、神仏習合の中の神道、そして四季の祭礼などについて学ぶ神道展示室を観覧する。

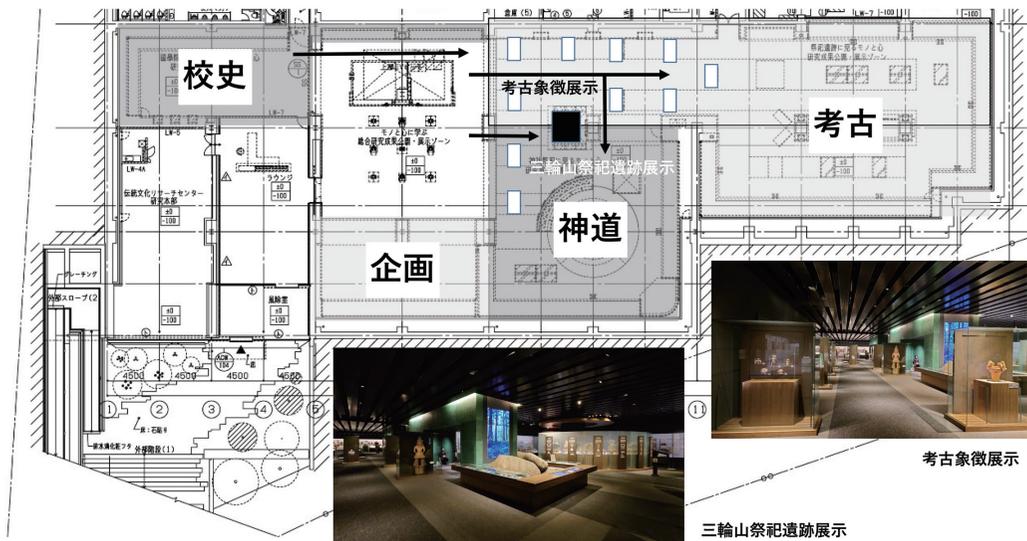


図1 館内概要図

II. 國學院大學博物館で見る

(1) 神道のはじまり—非創唱宗教の展示—

博物館資料は、何よりも実物であるという点に、来館者の心をキャッチする重要なポイントがある。しかし、それは、あくまでモノが辿ってきた最終段階の姿であり、誰が、何のために作って使った（場合によっては廃棄に至った）のか、というプロセスやコンテキストを示しにくい点に難があった。とりわけ、宗教を含む人の心の問題を、どのように展示するかという課題は大きい。

就中、当館の主要な展示テーマである神道は、仏教・キリスト教・イスラム教などの創唱宗教と異なり、明確な教祖・教義・教典を伴わずにはじまった経緯がある。従って、その展開過程や内実についての展示は、曖昧なものにならざるを得ない。しかし、2世紀後半まで「大乱」の中にあつた倭国において、多様であつた各地の葬祭が解体され、大型前方後円墳を頂点とする新しい墓制が汎列島的に支配的となつた3世紀半ばの現象は、その間に新たな国家と宗教、すなわち「日本」と「神道」の原型が生まれた事実を示唆するものである。そして、かかる古墳時代の神祭・葬祭が、律令期に確立する神祇祭祀へと展開してゆく経緯については、考古・神道の両部門を擁する当館ならではの取り組みによって、より明快な説示が可能になるであろう。

(2) 信仰者の視点—信仰対象としての博物館資料—

ところで、宗教資料をどのように見せるのか、という点にも様々な課題がある。モノである博物館資料としての宗教資料は、学術的な研究対象である以前に、信仰の対象であったり、信仰の美術であったり、信仰の記録であったりするのだ。

宗教資料の「見せ方」というテクニクの部分でも、単に製作技法・使用痕跡などの諸特徴を見易く説示するだけではなく、信仰者の視点を理解した展示を心掛けるべきであろう。ある時、展示ケースの中の仏像・神像に対して、来館者が「こんな所に入れられてかわいそうに……」と呟いた場に遭遇したことがあった。以後、宗教資料を展示する際は、可能な限り周囲に余計なものを置かず、来館者が思わず手を合わせたくするような雰囲気演出にこだわっている。例えば、筆者が伊豆国走湯山（現在の伊豆山神社）の歴史に関する特別展『走湯山と伊豆修験』を担当した際には、下から蠟燭や護摩の火に照らされているようなライティングを試み、かつて実際に祀られていた当時の文脈・雰囲気が来館者に伝わるよう工夫したことがあった。

一方、博物館で展示している宗教資料の中には、その性質や、原資料所蔵者の意向などによって、写真撮影禁止とせざるを得ないものが少なくない。この点は、多くの博物館施設が、展示資料の撮影を可とし、データベースの画像も著作権フリーで公開する流れが加速してゆく中、改めて検討を要すべき課題と捉えている。なお、これは神道をはじめとする日本宗教そのものに関わる問題ではないものの、人骨を展示した際には、「○○遺跡から出土した人々は、私たちと同じ現生人類です。観覧・撮影等にあたりましては、人間の尊厳にご配慮いただきたくお願い申し上げます」というパネルを掲げたことを付言しておく。

(3) 信仰の空間、宗教的な行為

博物館で展示しにくいものは、「空間」である。かつて、富士山が世界遺産に登録された際に『富士山—その景観と信仰・芸術—』展を開催したが、当然のように富士山を展示室に持って来るわけにいかない。従って、展示し難い「空間」をどのように説示するのかという点も課題となる。つまり、三次元的なものを二次元（画像・動画）に編集したり、それを更に立体模型や3Dイメージで示したり、関連する展示資料にまつわる情報をQRコードなどで閲覧可能にしたりするなどの工夫が必要になるのだ。例えば、『走湯山と伊豆修験』展では、今の伊豆山神社にあたる走湯権現の中核域について、地形の立体模型を作成した上で、航空写真、地形図、地質図や、前近代の伽藍配置図などをプロジェクションマッピングで示す取り組みを実践した。

また、博物館で展示される宗教関係資料からは、それを作って使った状況、つまり宗教行為の実態を直ちに察知することが困難な場合が多い。通常は見ることでできないエソテリックな宗教行為の現場については、特に撮影・録音等を許可された画像・

動画などを用いて、モノ資料にまつわる「行為」を適切に説示すべきであろう。具体的には、全国各地の社寺で行われる祭祀・祭礼の動画をタッチパネル式画面で館内放映したり、変容してゆく神事芸能に関するアーカイブを蓄積して「國學院大學デジタルミュージアム」で公開したり、YouTube サイトの「國學院大學オンラインミュージアム」において常設展・企画展・特別展開連の番組を作成してオンライン放映するなど、体系的な情報の整理・公開に努めているところである。なお、音声・字幕を付した YouTube 番組は、交通や障害によって直接の来館が難しい方々への便を図るとともに、新型コロナウイルス感染症などの防止に関する点でも効果を発揮した。

Ⅲ. 國學院大學博物館で体感する

(1) 日本文化を知るために—日本と世界を比較する—

以上、モノ資料と、それにまつわる空間・行為を如何に説示するか、という問題に触れてきたが、やはり宗教文化を「体感」ということも重要であろう。コロナ禍によって、対面事業が難しい局面もあるが、「日本文化を体験する夕べ」と題して、

國學院大學博物館
Kokugakuin University Museum

世界の宗教
を知る
ワークショップ

参加無料
要事前申込

國學院大學は、日本文化発信の拠点です。しかし、異文化に対する尊敬と関心を欠いたまま、自らの文化を理解することはできません。そこで、当館の展示と連動して、世界と日本の宗教を体感・実感するワークショップを企画しました。本学が所在する渋谷・横浜で異文化を学び、日本を見つめ直す機会。ぜひ、ご参加ください。

1	JUDAISM	8月28日(金)
2	ISLAM	10月4日(日)
3	SHUGENDO	10月18日(日)
4	TAOISM	10月25日(日)

SHINTO
11/6 SUN 神道を知る

CHRISTIANITY
11/13 SUN キリスト教を知る

HINDUISM
11/19 SAT インド文化とヒンドウ教を知る

世界の宗教
を知る
ワークショップ Part.2

参加無料
FREE

SPECIAL PROGRAM
11/23 WED and 12/17 SAT

全コース共通
【対象】中学生以上 【定員】各館30名(抽選)

特別講演
「世界の宗教が禁じたきたもの」

図2 ワークショップ「世界の宗教を知る」・同 Part. 2

主に在日外国人の方々や、留学生を対象に雅楽を聞き、狩衣を着る体験イベントを開催して好評を博した経験もある。日本の文化を、我々日本人自身が理解することも大切だが、外国の方々の理解を深めて頂く取り組みも実施をしているのである。

同時に、神道をはじめとする日本文化の特質を理解するためには、日本宗教・日本文化と、世界の諸宗教・異文化と比較する取り組みが欠かせない。そこで我々が企画したのが、「世界の宗教を知るワークショップ」である。幸い、本学渋谷キャンパスが所在する渋谷区には、日本ユダヤ教団、聖ドミニコ・カトリック渋谷教会、そしてイスラム教のモスクである東京ジャーミイなどがあり、たまプラーザキャンパスが所在する横浜市の中野街には、関帝廟・媽祖廟といった道教寺院が存在する。そして、渋谷区には、明治神宮をはじめとする多数の神社や、修験道の山であった相模大山へ通じる大山街道246号線も存在する。かかる当館の環境を活かして、日本の神道・修験道や、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教などの諸宗教に関する特集展示・展示解説を実施し、これに加えて現地の宗教行事に参加させて頂くなど、本学学生や、一般の方々を対象とした行事を実施したのであった。これはまさに、博物館に「来て、見て、知る」の実践であるといえよう。

(2) 宗教系大学博物館連携と異文化相互理解—日本の中の世界、世界の中の日本—

このように、現代の日本には、多様な国々から来訪した方々だけでなく、アイヌの人々などの先住民族や、在日外国人も暮らしを営んできた。私たちは、このような日本列島の本州を中心とする地域「以外」に由来する文化と、いわゆる日本文化との比較こそが、彼我の文化を理解することに繋がると確信している。

かかる観点から、2014年（平成26）にキリスト教系の西南学院大学博物館と「西南学院大学博物館と國學院大學博物館との研究協力に関する協定書」を取り交わし、互いに日本文化とキリスト教文化などを紹介する年数回の相互貸借展示、ワークショップのほか、大きな特別展も共同で開催してきた。これは、2013年度（平成25）に、西南学院大学側からの提案によって特別展『日本信仰の源流とキリスト教—受容と展開、そして教育—』を共同開催したことに端を発する。その上で、2018年（平成30）に再び「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」世界文化遺産登録記念として、特別展『キリシタン—日本とキリスト教の469年—』も開催した。同展示会は、もはや日本の伝統宗教の一つであり、隠れキリシタンの問題も含めて日本文化の一端を構成していると言っても過言ではないキリスト教を取り上げ、「日本の中の『世界』」が「日本化」してゆく過程を含めて歴史的な展開を概観したものである。「日本の中の『世界』」に目を向けることは、ひいては「世界の中の『日本』」について考えてゆく契機にもなるであろう。

おわりに

最後に、これからの宗教系大学ミュージアムが果たすべき役割についても述べておこう。

冒頭に述べた通り、独自の研究、学生に対する教育参考、社会に対する研究発信の3点が、大学博物館の主要な使命となるが、今後の宗教系大学博物館においては、宗教文化研究を介した社会のハブとして機能することも求められてくるに違いない。

特に、2000年代以降は、大きな戦争・紛争、あるいは社会の貧困化をきっかけとして、異文化・異民族・異宗教に対するフォビアが、世界的な規模で顕著になってきた。このような人類社会の危機に対しては、学生のみならず、一般社会に対する「宗教リテラシー」の涵養に向けた支援も欠かせない。日本文化を講究してきた國學院大学の博物館においても、異文化・他宗教との比較を通して彼我の特質を明らかにし、人間集団のアイデンティティと密接に関わってきた宗教への理解を深め、これを尊重する態度を養ってゆくことが大きな役割の一つになるのではないかと考えている。